

神葬祭のながれ

※葬儀は地域差がありますので、次第や内容について説明やイラストと異なる場合があります。

逝去当日

喪主は葬儀の日程を決め、次いで神職に葬儀を依頼し、火葬や埋葬に伴う手続きを行います。

帰幽奉告・枕直しの儀

神葬祭は、氏神様に故人が亡くなった旨を報告することから始まります。家庭の神棚に奉告し、神棚の前面に白紙（半紙）を貼ります。これは遺族が故人のおまつりに専念するためなどの理由があります。故人を北枕にして顔を白布で覆い、枕元に枕屏風を立て、守り刀を胸元または枕下に置きます。

通夜祭・遷霊祭

通夜祭では、家族や生前親しかった人が集まり、夜通し故人を偲びます。本来、通夜祭は故人の蘇りを祈るものでした。かつて酒宴を設ける地方があったのも、故人とともに食事をするので、御霊を遺体に引き戻そうとしたからです。

通夜祭の後、故人の御霊を遷霊に遷し鎮める遷霊祭を行います。

神葬祭本儀（2日目）

葬場祭（告別式）

故人との最後のお別れを行う儀式です。

柩前の祭壇を飾りつけ、酒饌をお供えし、斎主（神職）が故人の手柄や経歴、功績をたたえ、今後は祖先の霊とともに喪家と遺族を見守ってくれるようにとの願いを込めた祭詞を奏上します。最後に参列者、会葬者が一人一人玉串拝礼をして故人との訣別を行い退出します。肉親や近親者は、安らかな死後を祈って対面した後、霊柩を奉じ、葬列をととのえて火葬場へと向かいます。

神葬祭後儀

「みたままつり」（霊前祭と式年祭）

霊前祭は、帰幽の日から十日目ごとに行うおまつりです。特に十日祭や五十日祭（仏教の四十九日に相当）には、家族や親族が集まり故人を偲びます。この五十日祭を済ますと忌明けとなり、神棚のおまつりを再開します。

その後、百日祭を行い、以降は一年祭、三年祭、五年祭、十年祭と節目ごとに墓前や御霊舎に親族が集い、神職が祭詞を奏上し式年祭を行い故人を偲びます。

